2015 · 第7辑

日语教育与日本学

■日本文学研究 ■日本语学研究
■日本文化研究 ■日本文论选译 ■学术动态

主编◎刘晓芳 徐 曙 曹大峰
执行主编◎钱晓波

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

2015 · 第7辑

日语教育与日本学

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS
·上海·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学(第7辑)/刘晓芳,徐曙,曹大峰主编. —上海:华东理工大学出版社,2015.12

ISBN 978-7-5628-4516-4

Ⅰ.①日… Ⅱ.①刘…②徐…③曹 Ⅲ.①日语-语言教学-文集②日本-研究-文集 Ⅳ.①H36-53②K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第005879号

责任编辑 / 嵇 蕾
装帧设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地址:上海市梅陇路130号,200237
电话:021-64250306
网址:press.ecust.edu.cn
邮箱:press_zbb@ecust.edu.cn
印　　刷 / 常熟市华顺印刷有限公司
开　　本 / 787mm×1092mm 1/16
印　　张 / 10.75
字　　数 / 258千字
版　　次 / 2015年12月第1版
印　　次 / 2015年12月第1次
定　　价 / 58.00元

版权所有 侵权必究

日语教育与日本学

2015·第7辑

中国日语教学研究会　上海分会 日语教育分会 民族院校分会　主办

编委会主任：徐一平
主　　编：刘晓芳　徐　曙　曹大峰
执行主编：钱晓波

编委会顾问（按姓氏汉语拼音为序）

陈俊森（华中科技大学）　冈崎眸（茶之水女子大学）
刘金才（北京大学）　皮细庚（上海外国语大学）
宿久高（吉林大学）　谭晶华（上海外国语大学）
文秋芳（北京外国语大学）　吴寄南（上海国际问题研究所）
修　刚（天津外国语大学）　张　辉（华东理工大学出版社）

编委会成员（按姓氏汉语拼音为序）

庵功雄（一桥大学）　蔡凤林（中央民族大学）
曹大峰（北京日本学研究中心）　杜　勤（上海理工大学）
高　宁（华东师范大学）　侯仁锋（县立广岛大学）
胡令远（复旦大学）　冷丽敏（北京师范大学）
李晓博（深圳大学）　林　洪（北京师范大学）
刘晓芳（同济大学）　刘雨珍（南开大学）
毛文伟（上海外国语大学）　潘　钧（北京大学）
潘世圣（华东师范大学）　钱晓波（东华大学）
邱根成（上海对外经贸大学）　杉村泰（名古屋大学）
盛文忠（上海外国语大学）　田野村忠温（大阪大学）
王宝平（浙江工商大学）　王铁桥（河南大学）
王婉莹（清华大学）　王　勇（浙江工商大学）
望月圭子（东京外国语大学）　吴　川（日本大学）
毋育新（西安外国语大学）　徐静波（复旦大学）
徐敏民（华东师范大学）　徐　曙（上海对外经贸大学）
徐一平（北京日本学研究中心）　许慈惠（上海外国语大学）
尹　松（华东师范大学）　张文丽（西安交通大学）
赵　刚（西安交通大学）　赵华敏（北京大学）
周异夫（吉林大学）　朱桂荣（北京日本学研究中心）

目　　录

·日本文学研究·

谷崎润一郎国际研讨会专栏

物語る力—谷崎潤一郎の物語方法— …… 千葉俊二(1)
文学モデルとしての推理小説—谷崎潤一郎の場合— …… アンヌ·バヤール=坂井(7)
『アラビアン·ナイト』から〈歌〉へ—『蓼喰ふ蟲』の成立前後— …… 細川光洋(16)
「卍」の幾何学 …… Steven Ridgely(23)
「芸談」に見る三十年代谷崎の文学·文学者観 …… Gala Maria Follaco(29)
身体与女性——谷崎润一郎《细雪》论 …… 郭晓丽(37)

日本文学研究高层论坛专栏

日本现代文学"批评理论"的建构 …… 李　强(44)
梦幻中的杀虐——河野多惠子文学中的性幻主题 …… 肖　霞(51)
论林芙美子《浮云》的虚无主义思想 …… 李先瑞(62)
村上春树的"水井"谱系及隐喻——以《奇鸟行状录》为中心 …… 邹　波(68)

青年学者园地

从战前到战后——坂口安吾代表随笔解读 …… 黄　芳(76)
夏目漱石和"汉文学"——在"入世"和"出世"之间 …… 魏　然(88)
消失后的"孤独"——论村上春树短篇小说《蓝色消失》与《象的消失》 …… 徐　蕾(96)

·日本语学研究·

显性衔接机制的日汉语篇对比分析——以《蜘蛛之丝》为例 …… 张　颖(106)
现代日语关系小句谓语动词的时(tense)体(aspect)小考 …… 张　典(114)
从信息界域理论看日语模糊限制语 …… 李　凝(124)

·日本文化研究·

江户儒者林罗山与朱子学的官学化 …… 傅　霞　朴　彦(134)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

·日本文论选译·

私小说论 …… 小林秀雄 著　周砚舒 译(145)

·学术动态·

关于“中国日本文学研究高层论坛暨谷崎润一郎国际研讨会”的贺信 …… 聂珍钊(158)
“纪念谷崎润一郎逝世五十周年国际研讨会”在上海召开 …… 钱晓波(160)
博导风采 …… 肖　霞(161)
“中国日本文学研究高层论坛”在同济大学外国语学院举行 …… 梁　艳(162)

·征稿启事·

《日语教育与日本学》第8辑、第9辑征稿启事 …… 《日语教育与日本学》编辑委员会(163)
《日语教育与日本学》稿件格式要求 …… 《日语教育与日本学》编辑委员会(164)

版权声明：作者投稿或接受集刊编委会约稿，即视为遵守集刊主办方与本社关于集刊出版合同之约定，同意授予本社该作品的专有许可使用权，包括但不限于该作品的专有出版权、复制权、发行权以及电子与网络传播权。

物語る力
—谷崎潤一郎の物語方法—

早稲田大学　千葉俊二

谷崎潤一郎にとって物語とは何だったのだろうか。また私たちは谷崎潤一郎という特異なひとりの作家が、その生涯をとおして小説という形態で提示した多くの物語を読むことで、そこに何を見出し、そこから何を得ることができるのだろうか。もちろん、物語は谷崎文学の専売特許ではないのだが、今年は谷崎潤一郎の没後五〇年ということで、新たな全集の刊行もはじまっている。そこには創作ノートをはじめ、さまざまな資料が公開される予定だが、その外にもいろいろな新資料が発見され、話題となっている。そんなことで谷崎にとって物語るということが、どんなことだったのかを考えてみたい。

一九三一(昭和六)年四月から六月まで「婦人公論」に連載された「恋愛及び色情」(原題は「恋愛と色情」)で、谷崎はその冒頭にジェローム・K・ジェロームの「ノーヴェル・ノーツ」からの「小説なんて要するに下らないもんだ、昔から世に著はれた小説は浜の真砂の数よりも多く、何千何百何十万冊あるか知れぬが、どれを読んだつて筋は極まり切つてゐる。煎じ詰めれば「先づ或る所に一人の男がありました、さうして彼を愛してゐた一人の女がありました」—— “Once upon a time, there lived a man and a woman who loved him” ——と、結局それだけのことぢやないか」といっている。

「ノーヴェル・ノーツ」は、ジェローム・K・ジェロームが1893年に刊行したユーモア小説である。四人の友人が集まってひとつの小説を書こうと試みた体験を、ずーっと後になって、これまで開けることもなかった抽出からその小説のためのノートが出てきたところから、おもしろ可笑しく物語ったものだけれど、その最後の結末にいたって語られた言葉が、ここに谷崎によって引用されたものである。結局、ひとりの男とひとりの女が出会うことによってひとつの物語は立ちあがり、それをさまざまな状況のなかにおくことで、千差万別で、複雑なストーリーをもつ小説へと仕上げられてゆく。

そうした意味では、村上春樹の「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」と題されたごく短い「スケッチ風の小説」は、物語の原初的な形態を示したものといっていいかも知れない。四月のある晴れた朝、僕は原宿の裏通りでひとりの女の子とすれ違う。それほど綺麗でも目立つところがあるわけでもないが、五〇メートルも先から彼女が僕にとっての100パーセントの女の子なのだということが分かる。僕の胸は地鳴りのように震え、口のなかは砂漠みたいに乾いてしまったけれど、どんな

風に話しかけていいかも分からずに、そのまますれ違ってしまう。

たったこれだけの話である。そして、この話のなかにはこんな風に話しかければよかったのではないかという、「『昔々』で始まり、『悲しい話だと思いませんか』で終わる」もうひとつの短い物語が組みこまれている。自分にとって100パーセントの女の子と出会ったという胸の高鳴りと、ただならぬ興奮がそのまま伝わってくるような切ない思いを感じさせる見事な作品だけれど、私たちは毎日、100パーセントの女の子から0パーセントの女の子にいたるまでのさまざまな異性と出会っている。そこから無数の物語が立ちあがり、物語られたとしてもいっこう不思議ではない。

物語を立ちあげる出会いは、何も男女の出会いにかぎられるわけではない。森鷗外はこれまでの生涯におけるサフランとの出会いをかえりみて、「どれ程疎遠な物にもたまたま行摩(ゆきずり)の袖が触れるやうに、サフランと私との間にも接触点がないことはない。物語のモラルは只それだけである」という。「物語」とは異質なもの同士が接触すれば、そこに必ず立ちあがるものなのだろう。それは酸素と水素が化合することで水が生ずるように、ふたつの異なった種類の物質が触れあうことで惹起するある種の化学反応とも似たものなのかも知れない。

今日、コンピュータによってきわめて複雑な演算が可能となり、これまでその原理が分からなかったさまざまな自然現象も、非常に単純なアルゴリズムに還元することができるようになってきた。たとえば、一九五〇年に数学者のアラン・チューリングは、自己増殖的な活性化因子を含む物質と、それを抑制する作用をもつ抑制因子を含む物質とが接触すると、活性化物質と抑制物質との拡散の速さの違いによって濃淡の縞模様を生みだす化学反応が生じることを、偏微分方程式の数式として提示した。反応拡散波によるチューリングパターンとよばれるその縞模様は、一九九〇年にフランスの研究グループが実験室ではじめて実現させることに成功したという。

一九九五年、近藤滋は熱帯魚を使って、さまざまな生物の縞模様もこのチューリング波の原理によっていることを立証したが、近藤の『波紋と螺旋とフィボナッチ　数理の眼鏡でみえてくる生命の形の神秘』(二〇一三年、学研メディカル秀潤社)によれば、チューリングの方程式のパラメーターの値をわずかに変えるだけで、キリンやシマウマなどの動物の模様をコンピュータ上でつくることができるという。数式がこの自然現象を数字をつかってパターン化しようとするものならば、物語とはこの人間世界の現象を言葉を使ってパターン化しようとするものだということができよう。

物語のもっとも簡単でシンプルなパターンが、男と女との出会いということである。物語によるパターン化が、自然現象のパターン化ともっとも異なるのは、天体の動きがわれわれの生理と無関係であるように、自然現象のパターン化は人間の意思とはまったくかかわることがないのに対して、物語はそれを物語るものにとっても、その物語を享受するものにとっても、その物語にかかわる人間の生理に根ざした欲望と直結しているということである。物語とは、あくまでも現在の私の欲望によってパターン化された世界認識なのだといえる。

谷崎潤一郎の「恋愛及び色情」に話を戻そう。もちろん、ここに昭和六年当時における

谷崎の欲望が色濃く反映していることはいうまでもない。前年の五年八月に谷崎は最初の妻である千代と離婚し、昭和六年一月に二十一歳も若い古川丁未子と婚約、四月に結婚式をあげている。「佐藤春夫に与へて過去半生を語る書」に「僕は丁未子との結婚に依つて、始めてほんたうの夫婦生活といふものを知つた。精神的にも肉体的にも合致した夫婦と云ふものの有り難味」が分かったとあるが、これまで長い間、千代とのあいだで夫婦間の生理的不和ということに悩んできた谷崎は、丁未子という新しい伴侶を得て、文字通り身も心も存分に解放することができたようである。

「恋愛及び色情」において、谷崎は西洋文学の及ぼした影響で、そのもっとも大きなものは「『恋愛の解放』、――もつと突つ込んで云へば『性慾の解放』――にあつたと思ふ」といっている。西洋では男性が自分の恋人に聖母マリアの姿を夢み、「永遠女性」のおもかげを思い起こすというが、東洋にはこうした思想がなく、「女」という観念は、「崇高なもの、悠久なもの、厳粛なもの、清浄なものと最も縁遠い対蹠的な位置」におかれてきた。そうしたなかで平安朝の文学のみは、「女」が「男」のうえに君臨しないまでも、「女性崇拝の精神」をもっていた。そうでなければ、『竹取物語』のかぐや姫が最後に昇天するというような発想もなかったろうと指摘している。

そんな平安朝の男女の物語として、『古今著聞集』から刑部卿敦兼の話を紹介する。敦兼は世にも稀な醜男なのに、北の方はすぐれて器量の美しい人だった。宮中に五節(ごせち)の舞を見にいって、自分の夫のように醜い男はひとりもいないと思い、それからは夫に物もいわず、奥へ引き籠もって顔を見せなくなった。ある日、宮中から夜遅く帰っても、迎えに出るものもなく、装束を脱いでも畳んでくれる人もいない。そんな妻の仕打ちが恨めしくてやるせなく、心をすまして、篳篥(ひちりき)を取りだして、歌を繰り返しうたった。すると、女も急に哀れを催して、それからは夫婦仲が非常にこまやかになったという。

敦兼のような意気地のない、女々しい男は、武士の時代であったならば、「まことに男子の風上にも置けぬ奴、『男の面よごし』として擯斥されたであらう」といっている。また北の方の振る舞いも責められるものだが、『古今著聞集』の著者は、「それより殊になからひめでたくなりにけるとかや、優なる北の方の心なるべし」と、北の方の「優にやさしい心」がけを賞賛し、夫婦の美談として伝えている。この部分が掲載されたのは「婦人公論」四月号だが、執筆はおそらく三月上旬だったと思われる。丁未子との新婚生活に「優なる北の方の心」を期待する谷崎の心持ちがそのまま反映していると思われる。

このエピソードは『古今著聞集』の巻第八「好色」の箇所によっているが、そのひとつ前には、「後向きに車に乗りたる道命阿闍梨、和歌を以て和泉式部に答ふる事」という話が載せられている。ごく短いものなので、次にその全文を引いてみよう。

道命阿闍梨と和泉式部と、ひとつ車にて物へ行きけるに、道命うしろむきてゐたりけるを、和泉式部、「など、かくはゐたるぞ」といひければ、よしやよしむかじやむかじいが栗(ぐり)のゑみもあひなば落ちもこそすれ

道命阿闍梨は藤原道綱の子で、三十六歌仙の一人。名誦経者として知られるが、その

道命阿闍梨が和泉式部と同じ車に乗って、後向きにいるので、和泉式部がどうしてそうするのですかと尋ねると、「ああどうしよう、向こうか向くまいか、やはり向かないでおこう、あなたに向き合って、いが栗が笑み割れるようににっこりされたら、栗の実が落ちるように車から落ちかねませんし、戒律を破ることにもなってしまいますから」と、和歌をもって答えたという。

道命阿闍梨と和泉式部との関係は、当時、よく知られていたようで、『宇治拾遺物語』では巻頭の第一話で取りあげられている。「今は昔、道命阿闍梨とて、傅殿(ふどの)の子に色に耽りたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり。経をめでたく読みけり。それが和泉式部がり行きて臥したりけるに」と語りだされ、夜中に目覚めて、法華経を一心に読んでいると、五条西洞院の道祖神があらわれ、経を聴くことができたことを感謝する。身を清めて読経するときは、梵天、帝釈など高貴な方々が御聴聞なさり、私のようなものはおそば近くにも寄れないが、今宵は御行水もしないで読まれたので、梵天、帝釈も聴聞なさらず、おそば近くで拝聴できたのがうれしく忘れがたいという。

この話は「されば、はかなく、さは読み奉るとも、清くて読み奉るべき事なり。「念仏、読経、四威儀(しゐぎ)を破る事なかれ」と、恵心(ゑしん)の御房(ごぼう)も戒め給ふにこそ」と結ばれる。ここには明らかにひとつの価値観のねじれがある。仏教の戒律、世の常識からしても、末尾に置かれた説話者の批評はもっともなことなのであるが、そうした表面的な説教とは別に、説話者は民間に信仰された土俗的な道祖神のもつような野卑で、猥雑なエネルギーの解放をもくろんでいたと思われる。説話の根底には、この人間世界の秩序を律している常識的な規範を越えて、生命の底の奥深くにたくわえられたエネルギーを解放し、私たちの生そのものにひとつの躍動感を与えることがもくろまれていたといえる。

芥川龍之介は、この『宇治拾遺物語』の第一話に取材して「道祖問答」(大正六・一・二八「大阪朝日新聞」)を書いている。芥川は説話のもつ野性味あふれるエネルギーに触れることで、自己の生をふるいたたせようとしたが、それに必ずしも成功したということはできない。一方、「恋愛及び色情」において谷崎は「古今著聞集で思ひ出したが、今昔物語の本朝の部第二十九巻にある」日本には珍しい女のサディストの話に言及し、「性慾のためのFlagellationの記事としては、東洋に於ける最も古い稀な文献の一つ」として長々と引用している。当時の谷崎の関心が奈辺にあったかということをうかがわせ、興味深いものである。

結局、物語とは、これを享受するものにしても、また語りだすものにしても、この世界の森羅万象あらゆる事象からいくつかの要素を抽出し、その異質なもの同士の出会いを現在における自己の欲望にかかわらせながら、その諸要素を線条的に結合させたものということができる。それはあたかも満天の星空に任意に線を引くことによって、ひとつの物語をもつ星座をつくりだすことにも似ている。果ても知れない無限の彼方にまで拡がる広大な天空のなかの任意の点として存在する私たちは、満天の夜空を見上げては自己の存在の微少さに愕然とし、その存在の位置の見きわめ難さにある種の恐怖感さえ覚える。天空を埋め尽くす、限りない無数の星のなかに、〈物語〉という星座を描くことによって、そこに私たちはひとつの座標軸を獲得しようとしているのだといえる。

それにしても、谷崎がここで「恋愛及び色情」と、恋愛と色情とを区分しながらも、総括的に一体のものとして論じていることには、どのような意味があるのだろうか。連載の第一回の冒頭に掲げられた「断書」には、「かねてから島中社長に対し『恋愛論』を寄せる」約束になっていたが、充分に頭のなかでまとまっていないので、覚え書き的にアット・ランダムに感想を書いてみるとある。今日ならば、「恋愛について」とか、「恋愛と性」といったタイトルの方が自然と思われるが、そもそも「色情」という語はもはや死語で、今日ほとんど使用されることもない。

このことは谷崎の再婚問題に絡んでいたと思われる。千代と離婚後、まず谷崎が再婚相手と考えた女性は、谷崎家にお手伝いさんとして勤めていた宮田絹枝である。昭和六十一年三月十五日の「毎日新聞」大阪版には「谷崎潤一郎の“忍ぶ恋”」という見出しで、谷崎邸に一年ほどお手伝いさんとして勤めた宮田絹枝に宛てた書簡七通が発見されたという記事が載った。書簡は昭和五年二月から八月のもので、宮田絹枝は当時二十歳で、昭和四年末までに仕事を辞めて谷崎邸を去っていた。七月十四日付の書簡では「正月以来の私の家庭の問題も、今月中にはきまりが付きさうですから、どうぞ何処へもいらっしゃらず待ってゐて下さい」と、真剣に結婚を考える気持を述べている。

たをやめに〇〇〇〇〇〇〇昼下り庭を見をれは啼くほとときす

昭和四年十一月の「相聞」に掲げられた「春、夏、秋」のなかの一首である。初出誌以来伏字が用いられてきたが、今回、全集にはじめて収められる歌稿の「ありのすさび」によってその伏字部分が「まらいらはせて」だったことが明らかになったが、この「たをやめ」は、おそらく宮田絹枝だったろう。谷崎終平『懐かしき人々　兄潤一郎とその周辺』(平成元・八、文藝春秋)には、谷崎夫婦、終平、絹枝の四人でいたとき、絹枝が「私は旦那様が一番大好き！」といい、それを聞いた谷崎が真っ赤な顔をしたのに驚かされたというエピソードが記されている。

また後日に、同居していた「石川のお婆さん」(千代の伯母で、千代は彼女の養女となっていた)が、「お絹が近いうちに旦那様と結婚するのだと触れ廻っている」と終平に告げると、終平はそれを嫂である千代に話したといい、それを聞いた谷崎は告げ口をしたとして烈火のごとく怒ったという。こっそりと絹枝との結婚話を進めてきた谷崎は、おそらく千代と佐藤春夫からの強硬な反対にあい、宮田絹枝との結婚を断念させられたようである。終平は「兄は不思議な人だと思う。お絹のような教養のない女を家に入れてうまく行くと思うのが理解出来なかった」といっている。

次には「幼少時代」で明かされた偕楽園の女中である。すでに嫁にいっていて谷崎の願いはかなわなかったけれど、この時期、再婚相手を自己の好みのタイプの女中に求めていたようだ。そうした欲望は谷崎自身の「色情」とかかわりをもっていたのではないだろうか。『谷崎潤一郎家集』には「心におもふ人ありける頃鞆の津対山館に宿りて」という詞書をもつ、「いにしへの鞆のとまりの波まくら夜すがら人を夢に見しかな」という一首があり、先の「春、夏、秋」にも「つのくにのみぬめの浦にすむ海人の夢にも人にあふよしぞなき」との一首がある。この時期に「夢にも」あいたい「人」というのは、昭和二年三月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一日の初対面以来、激しく魅せられつづけた、それこそ谷崎にとって100パーセントの女だった根津松子である。

「蓼喰ふ虫」おいて谷崎は、主人公の「要に取つて女といふものは神であるか玩具であるかの孰れかである」といっている。仰ぎ見る崇拝の対象である「神」が人妻で、「夢」にあうこともままならない状態ならば、いきおい再婚相手に「玩具」を選ばざるを得ないことにもなる。結局、谷崎が再婚相手として選んだのは、谷崎家に出入りしていた大阪府女子専門学校卒の仲間で、谷崎自身が文藝春秋への世話をした、二十一も年下の古川丁未子だった。丁未子との再婚直後に「盲目物語」が書かれているが、これは語り手の弥市がお市の方を思慕する物語であると同時に、秀吉のお市の方へのかなわぬ恋の形代としてお茶々を娶る物語でもある。後年、谷崎はお市の方を松子の念頭に描いたと告白するが、丁未子が松子の形代だったことは間違いない。

恋い焦がれる恋愛の対象と、おのれの色情に満足を与えてくれる対象とのあいだの乖離と分裂。ここに「恋愛及び色情」において谷崎が問題としたことの核心があるといえる。そのひとつの解法を谷崎は古典に描かれた男女の姿に求め、「古への男は婦人の個性に恋したのでもなく、或る特定の女の容貌美、肉体美に惹きつけられたのでもない。彼等に取つては、月が常に同じ月である如く、『女』も永遠に唯一人の『女』だつたであらう」という。そのためには常闇の夜の暗さを必要とするが、それは近代の社会からはすでに失われたものだった。

こうした問題への谷崎なりの解答を、物語という形式をとおして模索したのが「盲目物語」であった。語り手の弥市を盲目のもみ療治をする茶坊主とすることで、視界を閉ざされた暗闇の世界に触覚や聴覚などの感覚のなかで、お市の方とお茶々とは同一化されて、「永遠に唯一人の『女』」としての幻影が確保される。ここに昭和六年当時の谷崎がかかえもっていた欲望に絡めとられた世界認識のありようは如実に反映している。谷崎にとって物語るとは、自己の生の奥深くに隠されてある欲望と折り合いをつけながら、自己の生そのものを解放することでもあって、物語ることと生きることとはまさに同一のことがらだったのだといえよう。

作者情報

千葉俊二　男　早稲田大学教授

研究方向：日本近現代文学　　E-mail：chiba@waseda.jp

文学モデルとしての推理小説
—谷崎潤一郎の場合—

フランス国立東洋言語文化大学
日本研究センター
アンヌ・バヤール＝坂井

ある作家がさまざまなジャンルを探索し、その作品が幾つものジャンルに属することは珍しくない。知名度を高めるために、普段書いているものが属するのよりも読者の多いジャンルに属する作品を書くメリットもあるし、その方が原稿料を多く支払われる、ということもあろう。また出版界としては、作家の知名度を利用し、さまざまなメディアにそれを活かして利益を上げる、といった商業的目的もあろう。

しかしまた、ある作家の仕事を顧みるとき、そのような経済的、或いは商業的な理由からだけではなく、文学性、文学生成上の理由からジャンルの境界を超えて作品が書かれていることも考えられる。その場合、作家がどれだけそれを意識していたか、という問題よりは、われわれが作品を読む時にその超ジャンル性というものを考慮し、分析の方法論に取り入れた時にどのような作品の解釈を紡ぎだすことが出来るか、という問題の方が重要であろう。つまり、作品解釈に発展性を与えるべく、その超ジャンル性を利用することが出来るのではないか。此処ではそのような仮定を立てて、谷崎作品を取り上げてみたい。

周知の通り、谷崎潤一郎はその初期の作品から多くの所謂「犯罪もの」を書いている。この命名は谷崎自身が使っているもので、たとえば「春寒」という昭和5年(1930年)に発表されたエッセイで谷崎は「探偵小説」という言葉と「犯罪もの」という言葉の両方を用いている①。探偵小説、推理小説、犯罪ものなど、ジャンルの名前としてはいろいろ考えられるが、谷崎が自分の作品を犯罪ものと読んでいるのはそれなりの理由があると思われる。

この「春寒」というエッセイで谷崎は探偵小説の限界というものをつぎのような表現を用いて示している。

> 味噌の味噌臭きは何とかと云うが、探偵小説の探偵小説臭いのも上乗とは云われない。若しも所謂探偵小説物の作家が最後までタネを明かさずに置いて読

① 「春寒」には千葉俊二氏が中公文庫版『潤一郎ラビリンスVIII 犯罪小説集』の解説で言及しており、また渡辺直己氏も集英社文庫版『谷崎潤一郎犯罪小説集』の解説で触れている。

者を迷わせる事にのみ骨を折ったら、結局探偵小説と云うものは行き詰まるより外はあるまい。読者の意表に出ようとして途方もなく奇抜な事件や人物を織り込めば織り込むほど、何処かに必ず無理が出来自然の人情が遠くなり、それだけ実感が薄くなるから、たとえ意表に出たにしてからが凄みもなければ面白味もなく、なんだ馬鹿々々しいと云うことになる。

…

単に読者の意表に出ると云うだけなら、奇抜な筋を考えないでも、書きよう一つで実は案外たやすいのである。たとへば崖から石が落ちて来て脳天を打たれて死んだ男を、さも他殺らしく書き起して、いろいろ容疑者らしい人物やそれらしい理由を仔細らしく並べ立てて、うんと事件を迷宮に追い込んで置いてから、最後の一ページで背負い投げを喰らわしたらどうか。ちょうどいくら考えても分らない数学の問題を、調べてみたら誤植があったと云うようなもので、そんなものを読まされた読者はきっと腹を立てるだろう。だが、これは極端な例だけれども、そう云う卑怯な

「落ち」を付けた物が、外国の作品にもある。何と云うのか、題も作者も忘れてしまったが、僕自身そんなのに打つかってひどく忌ま忌ましかったことがあった。それほどでなくても、今の探偵小説は一面に於いて奇抜な思いつきを競うと同時に、一面に於いては愚にも付かない事を書きよう一つで勿体をつけているのがある。中には相当にカラクリがうまく出来たのもあるが、要するに婦女子を欺く物に過ぎない。①

これは谷崎にしてはいささか歯切れの悪い発言だという気がするのだが、それは何を意味しているのであろうか。探偵小説臭くない探偵小説は何故上乗なのだろうか。最後まで読者を待たずにタネを明かす探偵小説などそもそも探偵小説として成り立つのだろうか。探偵小説はまた実感が薄くてはいけないのだろうか。そして、この場合の「実感」は何を指すのだろうか。また、その最後で意表に出る小説は必然的に「実感」を失うのだろうか。谷崎のこのような発言が注意を引くのは、その3年前に発表した『饒舌録』で谷崎が示した小説観とある意味で矛盾しているとも思えるからである。

いったい私は近頃悪い癖がついて、自分が創作するにしても他人のものを読むにしても、うそのことでないと面白くない。事実をそのまゝ材料にしたものや、そうでなくても写実的なものは、書く気にもならないし読む気にもならない。

…

事実小説でもいいものはいいに違いないが、ただ近年の私の趣味が、素直なものよりもヒネクレたもの、無邪気なものより有邪気なもの、出来るだけ細工

① 『谷崎潤一郎全集』、第二十二巻、273～274頁参照。

のかかった入り組んだものを好くようになった。①

この数行は谷崎の小説観を理解する上でとても重要なのだが、先に上げた「春寒」のたとえば「奇抜」なものの批判と照合すると、一種のずれがあるように思われる。また、『饒舌録』の細工と「春寒」のカラクリなども無関係とは思われないのだが、一方は肯定され、他方は否定されている。そのような点から、いささか歯切れの悪い中にも先のもので谷崎が批判している、奇抜なもの—それは筋であろうと、脚色であろうと、さまざまな在り方が考えられるが—とその数年前に谷崎が書いていたひねくれた、細工のかかった入り組んだものの賞賛はどのように繋がり、その一見矛盾している側面はなにを表しているのだろうか。また谷崎が用いている表現のなかで、多分最も重要なのは「卑怯」という形容で、それが形容である以上、ひねくれた奇抜なものの中にも卑怯なものとそうでないものがある、というニュアンスを谷崎は表していることになる。それでは卑怯でない入り組んだものとは何を指すのであろうか。この問題にはまた後に触れたい。

いずれにしても、このようにそれが「卑怯」であろうとなかろうと入り組んだ筋を好んでいた谷崎が推理小説、犯罪小説に興味をもったことは必然的な成り行きと云える。

千葉俊二氏が指摘しているように②、1929年に谷崎は2冊の『犯罪小説集』を刊行しているが、そこでは7＋9編の短編、中編が収録されている。

『潤一郎犯罪小説集』(新潮社刊)
『日本に於けるクリップン事件』(1927)
『白昼鬼語』(1918)
『或る罪の動機』(1922)
『私』(1921)
『途上』(1920)
『前科者』(1918)
『黒白』(1928)

『日本探偵小説全集第五篇谷崎潤一郎集』(改造社刊)
『秘密』(1911)
『柳湯の事件』(1918)
『或る少年の怖れ』(1919)
『人面疽』(1918)
『金と銀』(1918)
『呪はれた戯曲』(1919)

---

① 『谷崎潤一郎全集』、第二十巻、73頁参照。この一節は所謂「小説の筋論争」への谷崎の参戦を期していることで有名である。

② 中公文庫版『潤一郎ラビリンスVIII 犯罪小説集』解説、283—284頁参照。

『ハッサン・カンの妖術』(1917)
『途上』(1920)
『青塚氏の話』(1926)

このリストから谷崎の犯罪小説観のいくつかの特徴を読み取ることが出来るのではないだろうか。ここに挙げられているもののほかにも定義によっては犯罪小説と看做す事の出来る作品を谷崎は書いているのだが、ここで注意を促したいのは殺人がその小説の中で起こるからと言って即それが犯罪小説であるとは全く限らない、という点である。

谷崎潤一郎の作品のなかで人が殺されることは多く、その極端な例を一つあげるとしたら人が次から次へとばたばた殺される『お艶殺し』(1915)であろうが、この作品はこの2冊の犯罪・探偵小説集には所収されていない。従って、そのジャンルの定義で重要なのは内容よりは仕掛け(カラクリ)である、ということになり、だからこそ谷崎は書きよう一つで探偵小説は出来上がってしまうと言っていたのであろう。

ではまた登場人物の種類によって探偵小説などは定義されるかというとそうでもなく、例えば谷崎の犯罪小説、探偵小説には厳密な意味での探偵は殆ど登場しないと言える。

それでは何がこの場合定義の要になり得るのであろうか。仕掛け、とはどのように文章上機能するものなのであろうか。語られている事件が何であれ、その原因からその展開、そしてその結末までが順に時間の推移を追って語られていれば、そこには何の謎も所謂ミステリーもあり得ない。ここで大雑把にミステリー小説と言っても良いのではないかと思われるが、ミステリー小説を成り立たせているのは何なのであろうか。それはわれわれ読者が最初から読み与えられているナラティヴではなく、実は語られていない話、例えば犯罪は実際は(この実際とは物語世界の中での実際を意味する)どのように行われたかといった不在のナラティヴなのである。読者に与えられているナラティヴは、その不在のナラティヴを再現する事を目標としている。そして、たとえば手がかり(フランス語でのindice、英語でのclue)はその不在のナラティヴが現存の(読者に与えられている)ナラティヴに介入する点、不在のナラティヴと現存のナラティヴの接点だと言えるのだが、その介入を介入と認めるには解釈、或は推理と言った解釈学的、hermeneuticな作業が必要である。つまり、或る事象が現存のナラティヴでは無意味であり、その意味の欠乏を補充し、あらためて意味の確認を行うためには不在のナラティヴのコンテクスト内への移行が必要になる。それでやっとある無意味な事象が手がかりへの変貌を成し遂げる。そしてテキスト論上面白いのは不在のナラティヴが不在であるからこそ意味を付与する枠組みとして機能している点で、意味上では不在の効力とでも云うべきものを発揮していることになる。

このように大まかにミステリー小説の機能をまとめることが出来るとして、それを踏まえて谷崎に戻ると、谷崎作品では「解釈」の文学的効果が最大限に活用されており、その可能性が積極的に探索されていると言えるのではなかろうか。ここで全ての作品を取り上げるわけには行かないが、幾つの例を挙げて考えてみたいと思う。

1929年に列挙されている作品のうち、或る意味で最も探偵小説らしい小説は『途上』

(1920)だと云えるかもしれない。これは三人称で語られており、一人の会社員(湯河)が会社の帰りがけにある私立探偵(安藤)に呼び止められるところから始まる。そして二人の会話を通して、その会社員の前妻が病死していることを読者は知り、それが実は会社員が犯したプロバリティー犯罪だという事が少しずつ判明して行く。ここで現存のナラティヴの展開はさまざまな事象の知識を読者にもたらし、その事象の羅列が不在のナラティヴ(会社員による妻の殺人幾つか未遂、そして成功するプロセス)を少しずつ構築して行く。ここで興味深いのは、先に挙げた「春寒」でこの小説がその殺人の方法の面白さから江戸川乱歩に賞賛されたけれども、実は自分が興味を持っていたのは殺人ではなかったと谷崎が書いている点だ。

> 自分で自分の不仕合わせを知らずにある好人物の細君の運命—見ている者だけがハラハラするような、—それを夫と探偵の会話を通して間接に描き出すのが主眼であった。殺人と云う悪魔的興味の蔭に一人の女の哀れさを感じさせたいのであった。
>
> …
>
> しかし要するに、自然主義風の長編にでもなりそうな題材を、探偵小説の衣を被せて側面から簡潔に書いてみたのである。①

ここで興味深いのは、谷崎が明確に自然主義的な方法と探偵小説的な方法を対立させている点で、そう考えてみると、自然主義的な方法が原因から結果へと心理的、社会的要素を取り入れながら話を原則的に時の流れに沿って展開させているところを、推理小説、ミステリー解明小説は原則的に結果から原因へと時の流れをも遡ろうとしている、という根本的な相違が見えてくる。自然主義を根本的に嫌い、受け入れなかった谷崎が、そういった意味でもミステリー解明小説に興味を持っていた事は当然だと言えるかもしれない。

この『途上』のもう一つの特徴は三人称で語られている点であろう。ミステリー解明小説の場合、不在のナラティヴがその不在故に機能するためには、全知の語り手が原則的に不可能なのはもちろんの事であり②、だからこそ知と無知、knowledge & ignorance の難しいバランスを保つために最も手頃な一人称語りが広く使われているのだ。『途上』の三人称でありながら、その語りは会社員に内的焦点化(internal focalization)されているため、その語り手は全知の語り手では全くなく、語り上の効果は一人称に大変近くなっている。また、最初の状況設定が行われた後、殆ど二人の登場人物の会話によって話が進められている以上、探偵がさまざまな事象をプロバビリティー上の証拠として指摘し、または暴露する前に語り手を通して予めそれが読者の方に漏れる事は回避されてもいるのだ。

---

① 『谷崎潤一郎全集』、第二十二巻、272頁参照。

② 全知の語り手が何かを語らないことによって不在のナラティヴを生みだすことは、つまり全知の語り手が実は全知ではないといった矛盾した状況を作り出し、それは語りのルール違反を意味する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com